

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷六十第

行發日一月二年二十正大

論叢

資本主義經濟學と自然法則 法學博士 河上 肇

納稅義務者としての國家 法學博士 神戸 正雄

階級に就いて 文學博士 高田 保馬

時論

養蠶業の擴張及び改善 法學博士 戸田 海市

農業不動産金融と一般不動産金融 法學博士 河田 嗣郎

說苑

個人主義及社會主義局外觀 法學博士 財部 靜治

舊岡山藩の社倉法に就て 經濟學士 黒 正 巖

雜錄

地租の改廢に就て 法學博士 小川 郷太郎

白耳義に於ける失業保險制度に就て 法學士 一戸 二郎

經濟論叢

第十七卷 第二號 (通卷第九十二號)

大正十二年二月發行

論叢

資本主義經濟學と自然法則

一、解題

河上肇

私は便宜のため、しばしば資本主義の經濟學又は社會主義の經濟學といふ言葉を用うる。けれども其れは、之が研究對象を標準としての區別ではない。詳しく言へば、資本主義的秩序の下における經濟現象を其の研究對象となせるものを資本主義の經濟學と名づけ、社會主義的秩序の下における經濟現象を其の研究對象となせるものを社會主義の經濟學と名づける、といふわけではない。私は、同じ資本主義的經濟組織を研究對象となせるものの中に、資本主義の經濟學と社會主義の經濟學との二派があると考へるのである。勿論、經濟學が一個の科學である以上、同一の現

象を研究對象となせるもの、中に、斯様な流派別の生ずべき筈はないのであるが、實は、經濟學の研究對象となせる社會現象が、極めて複雑なる個人的又は集團的の利害關係を伴ひ、さうして其等の利害關係が直接又は間接に、意識的又は無意識的に、研究者の觀察眼に影響を與へ、既に樹立され得た一定の科學的眞理でも、直ちに萬人の承認を得ることの頗る困難であると云ふ特殊の事情があるために、同一の現象を其の研究の對象となせる同じ經濟學の上に、全く相容れない二つの流派が對立することになつてゐるのである。即ち經濟學者のうち或る一派の人々は、資本主義の經濟組織こそ永久に維持さるべきものであつて、社會主義といふやうな組織は到底實現され得ないものだ、と考へて居り、さうして私は、斯様な結論をもつ經濟學をば、茲に資本主義の經濟學といふのである。ところが他の一派の人々は、之に反し、資本主義の經濟組織を以て、總ての事物と同じやうに、進化流轉の理法によつて支配さるゝを免れ得ぬものだとなし、それは何時かは崩壞して仕まつて、その代りに社會主義の經濟組織が實現さるゝに至るべきだ、と考へて居り、さうして私は、斯様な結論をもつ經濟學をば、假に社會主義の經濟學と名づけておくのである。マルクスの大著資本論は、即ち謂ふところの社會主義經濟學の一大權威であるが、しかし其れは、アダム・スミス以下歴代の資本主義經濟學者の研究と同じやうに、資本主義の經濟組織を其の研究の對象としたもので、現に之が題名は *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*

としてある。題して『資本』といふは、その研究對象が資本主義の經濟組織だからである。しかし其の又書に『經濟學の批判』としてあるのは、資本主義經濟學の批判といふ意味である。彼は資本主義の經濟學を批判することによつて、彼れ自身の經濟學を打ち立てたのである。さうして其の經濟學は、現在の資本主義的經濟組織が必然に崩壞の運命にあることの結論に導くものであるから、吾々は之を名づけて社會主義の經濟學といふのである。マルクスが社會主義者であるといふのを以て、その著資本論の中に、社會主義的社會の光景が描き出されてゐる筈だと豫期したならば、それは大變な誤解である。

私が名づけて資本主義の經濟學又は社會主義の經濟學といふのは、以上の如き意味のものである。さうして茲に本論文において問題とするところは、此の如き意味における資本主義の經濟學と自然法則との關係である。

言ふまでもなく、自然界においても人事界においても、萬物は流轉し、一切が進化しつゝある。しかるに、資本主義の經濟學は、既に述べたる如く、現存の經濟秩序の永遠性を信じ、これが改造の企ての總て不可能に了るべきことを主張する。しからは其の主張の根據は何處にあるかと云ふに、私の見るところによれば、勿論學者によつて其の重點の置き所こそ異なれ、畢竟何れも一

種の自然法則を以て其の議論の窮極の立脚地としてゐるのである。従て其の意味から言へば、資本主義の經濟學は皆な自然法則學派に屬する。普通に自然法則學派といへば、第十八世紀におけるフランスの重農學派を指す。けれども、それより今日に至るまで、苟くも私の謂ふところの資本主義の經濟學派に屬するものは、私の謂ふが如き意味において何れも一種の自然法則學派に屬すといふこと、そのことの一端を明かにせんとするが、本論の趣旨である。

資本主義經濟學の立脚するところの自然法則は、或は外界の自然 (outward nature) に屬するものがあり、或は人間の性情 (human nature) に係るものがあり、學者によつて其の重點の置き所を殊にしてゐるが、ともかく資本主義の經濟學は、古今を通じて、何等かの nature に、又は natural law に、その議論の窮極の立脚地を置くことにおいて、何れも其の趣を一にしてゐるのである。私は先づ古典學派について其の一二の例證を擧げるであらう。

一、マルサスの人口の原理

マルサスの人口論は、資本主義的組織の永遠性を主張する點において、極めて有力な議論を提示したものであつて、そのことは、人口論の出版當時英國の思想界を風靡してゐたゴドキンが、その公刊によつて忽ち勢力を奪はれて仕まつたのみならず、なほ其れより以後近時に至るまで、謂

ゆる人口法則を如何に見るか云ふことが、社會主義者の間において一問題とされつゝあるによつても、之を知ることが出来る。しかるに、その人口論の根據は、言ふまでもなく、一種の自然法則にある。

マルサスの人口論は、第一版と第二版とでは其の議論の上に著しき相違があり、なほ其の後の版本の上にも其れ／＼の變化があるが、しかし其の議論の窮極の立脚地が一種の自然法則にあると云ふことは、前後を通じて變りはない。

マルサスの言ふところによれば、*the power of population is indefinitely greater than the power in the earth to produce subsistence for man* (『人口の増加力は、人間の生活資料を生産する土地の力よりも、遙により大である』)。ところが『人間の生活には必ず食物が入用であつて、この事は吾々の天性に關する一つの法則であるから、此等二個の異なる力の結果は、常に平等に保たれなければならぬ』。そこで人口の増加に對しては、必然的に或る *check* (『妨げ』) が行はれることになるのであつて、その『妨げ』は、先づ罪惡又は困窮として現はれ(第一版)、しからずんば道德的抑制として現はれる(第二版以後追加)。

これがマルサスの謂ゆる *principle of population* (人口の原理) なるものゝ要領である。さて人間の社會は、此の如き人口の原理によつて支配されてゐるから、もし吾々が自ら進んで道德的抑

1) On Population, 1st ed., p. 14.

制を行はないならば、人間社會には到底罪惡又は困窮の根絶せられる見込はないのであつて、即ちマルサスの見るところによれば、『社會の各員總てが、安樂に、幸福に、且つ比較的閑暇に生活し、さうして彼等自身及び其の家族に向つて生活資料を供給することにつき、何等の心配を感ぜざるが如き社會が成り立ち得るといふことは、到底望なきこと、考へられる』²⁾のである(第一版)。そこで吾々の社會から幾分でも罪惡又は困窮を無くしやうと思ふならば、吾々自身が『道德的抑制』によつて人口の過剰を防ぐ外はないのであるが、マルサスの見るところによれば、その道德的抑制は、現在の資本主義的組織の下においてこそ、始めて有力に行はれ得るものである。

『早婚の傾向に對して何等かの抑制を加ふること、絶對的に必要なりとせんか、個々の個人が己れ自身の子を養育するの責任を有すといふ制度、即ち妄りに其の欲するところに耽る時は(マルサスの謂ゆる道德的抑制を爲さざることを意味する)吾々は其の自然の結果として生ずるところの不便及び困難に従ふの外途なきものであると云ふ制度ほど、それほど自然的な、それほど公平なものとは他になく、また其れほど神の法則及び最も賢明な人の制定した最善の法律と調和するものは他にないであらうと云ふこと、これは何人も容易に信じ得るところである。……この自然的なる妨げ(人口増加に對する)の作用は、全く財産の私有及び相續の制度に懸つてゐる』³⁾。だからマルサスの見るところによれば、要するに現存の資本主義的經濟組織、即ち a society, divided

2) 同上, p. 17.

3) 同上, 第六版, Bk. III, ch. III.—Ward & Lock Co's ed., p. 323.

into a class of proprietors and a class of labourers, and with self-love for the main spring of the great machine (『有産階級と労働者階級とに分れ、且つ利己を以て大機械の主たる動力となせる一の社會』) は、the inevitable laws of nature (『避くべからざる自然の諸法則』) に本づいてゐるものと、any fault in human institution (『何等人爲的制度の欠陥』) に本づくものではない、といふのである。

マルサの謂ゆる人口の原理並に其の原理から彼れの引き出した結論の大體は以上述ぶるが如くであるが、之で見ると、彼の出發點が一種の自然法則であり、その到達點が資本主義經濟組織の是認であること云ふことが、略ぼ理解され得るだらうと思ふ。

既に述べたやうに、『人口の増加力は、人間の生活資料を生産する土地の力よりも、遙により大なるものである』といふのが、マルサスの出發點であるが、この命題は、人間の繁殖力と土地の生産力との比較をなしたもので、つまり human nature と outward nature とに關する一つの natural law と看做すべきものである。何故マルサスは、人間の繁殖力の方が土地の生産力より遙に強いと見たか、その點には茲に立ち入る必要がない。本論にとつて必要なとは、ただ彼れの人口論の出發點が一つの自然法則だといふことを、明かにすることである。なほマルサスの人口論

4) 同上, p. 317. (第二版, p. 379.)

5) 同上

には、'food is necessary to the existence of man (『食物は人間の生存に必要なり』)といふことが、今一つの前提となつてゐる(人口論の第一版には、それが一つの公準 Postulateとして議論の冒頭に掲げられてある)。さうして此の事のために、人口の増加力と土地生産力との『二個の異なる力の結果は、絶えず平等に保たなければならぬ』といふ議論が生じて來るのであるが、この前提も亦たマルサス自身が言つてゐるやうに、『吾々の nature に關する一つの法則』なのである。要するに此等の諸法則、それがマルサスの謂ふところの『避くべからざる自然の諸法則』であり、且つ彼れの意見によれば、其等の避くべからざる自然の諸法則に本づいて——從て『何等人爲的制度の欠陥』に本づくにあらすして——現存の資本主義的經濟組織が成り立つてゐる、といふのである。

三、リカアドの地代論

資本主義の經濟學にとつて大切な仕事の一つは、資本主義的經濟秩序の下に成立するところの、各種不勞所得の是認である。其等不勞所得の成立が、『何等か人爲的制度の欠陥』に本づいてゐるのではなくて、『避くべからざる自然の諸法則』に本づいてゐるといふこと、そのことを論證しなければ、資本主義經濟學の本領たる、資本主義的組織の永遠性の確立が、完成され得ないのである。今リカアドの地代論は、不勞所得の一種たる土地の賃料を是認せんために打ち立てられ

たもので、資本主義經濟學に缺ぐべからざる有力な一つの學説である。しかし其の要領は、今日、中學校の教科書にさへ載せられてゐる位であるから、茲に之を繰り返して述べる必要はない。ただ私の明かにしたいと思ふことは、その議論の出發點がやはり一種の自然法則にあると云ふことである。

リカアドの考によれば、土地に地代を生ずるのは、favourable circumstances (都合好き條件)を具へ居る土地の、詳しく言へば、地味が豊饒であり又た位置の便利である土地の、面積に限りがあるといふことが、その第一の原因であり、なほ土地には一般的に the law of decreasing returns (收益遞減の法則)が行はれてゐるといふことが、その第二の原因である。ところが地代發生原因の第一事情たる、都合好き土地の面積に限りがあるといふことは、何時の世になつても人爲を以て動かすことの出来ない自然的事情であり、また地代發生の第二原因とされてゐるところの、收益遞減の法則は、土地及び作物の物理學的、化學的、生物學的、その他の諸性質から生ずる一自然法則であつて、これ亦た、社會組織の如何に拘はらず、何時如何なる場合にも行はるべき法則である。だからリカアドの考によれば、地代發生の原因は盡く自然的事情に歸するので、斯か不勞所得が今日或る人々の手に屬しつゝあるのは、勿論『何等人爲的制度的缺陷』に本づくのではない。地代は必然的に支拂はれねばならぬものであり、従て其れは穀物の價格を騰貴せしむる

原因となるものではない。彼はいふ『地代が支拂はるゝが故に穀物が高いのではなくて、穀物が高いが故に地代が支拂はれるのである。而して假ひ地主は彼等の地代の全部を棄つるも、穀物の價格には下落が起らないのであらう』。またいふ、『地代は……決して眞實に價格を左右せず、寧ろ其の結果である。……假ひ總ての地代が地主によつて抛棄せられても、土地の上に於て生産さるゝ貨物は低廉にはをらないであらう』。⁶⁾⁷⁾

要するに、リカアドの考へるところによれば、穀物の價格の高いことも、土地の使用に對して地代が支拂はるゝことも、皆な或る自然的な事情又は法則の結果であつて、それは到底人爲を以て動かすことは出来ないと言ふのである。

斯様に一定の社會現象を或る自然的事實又は自然的法則の所産と見ることが、私は假に社會現象の自然現象化觀と名づける。さうして此の如き社會現象の自然現象化は、常に古典學派の人々が、資本主義的組織を永遠視するために採用した手段であるのみならず、それはまた近代の學者が、同じ目的のために一樣に採用するところの常套手段である。私は次に其の一例を擧げて、この篇を終るであらう。

四、ボエーム・バエルクの利子論

6) 堀學士譯『リカアド經濟原論』103頁

7) 同上、284頁

既に述べたやうに、資本主義の經濟學にとつて大切な仕事の一つは、資本主義的秩序の下に成立するところの、各種不勞所得の是認であるが、其等不勞所得のうち、前項に述べたる土地に對する地代を除けば、主なるものは資本に對する利子である。

資本に對する利子の辯護につき、近代の學者中、最も有力な議論をなしたものは、ボエーム・パエルクであつて、彼れの大著『資本及び利子』⁸⁾は、利子論の歴史に一期を劃したものと稱される。私は今、資本主義の經濟學の最後の根據が常に何等かの自然法則に在ることの一例として、彼れの利子論に一瞥を與へたいと思ふ。

ボエーム・パエルクは、利子發生の原因を、『現在財は一般に、同じ種類及び數量の將來財よりも、より多くの價値を有す』⁹⁾といふ事實に歸してゐる。例へば、一定の人が今年の百圓と明年の百圓とを比較して、後者よりも前者を價値大なりとなすこと、言ひ換ふれば、現在入手の得る百圓は、明年受取り得るところの(例へば)百五圓と、始めて其の價値を等うすとなすこと、從て百圓に對する一箇年分の利子として五圓が生まれるといふこと、これが彼れ自分言ふ如く、彼れの利子論の Kern und Mittelpunkt であるが、その説の要領は、前に擧げたリカアドの地代説と同じやうに、今日では既に學界周知の事實であるから、私は茲に其れを繰り返す必要を認めない。ただ私の指摘したいと思ふことは、彼が利子の發生原因と認めてゐるところの謂ゆる價値時差が

8) Kapital und Kapitalzins. 1888年初刊

9) Positive Theorie des Kapitals, 1912年版, S. 425.

彼によつて一の自然的必然の事實を觀念されてゐる、といふことである。

彼は現在財と將來財とが一般に謂ゆる價値の時差を有する理由として、二つの事柄を擧げてゐるが、今一々それに立ち入る必要はない。如何なる理由で此の如き價値時差を生ずるに至ると彼が解釋してゐるにせよ、ともかく彼は、此の如き價値時差の存在を一つの自然法則と觀念してゐるのである。例へば、同じ高さを有する電柱でも、その距離が遠ざかれば遠ざかるほど、吾々の眼には益々小さく見えて來るといふことが、人間の眼球の先天的構造に本づく一つの自然的事實であると同じやうに、同じ種類及び數量の財であつても、その物の存在時點が現在を距るに従つて吾々は之が價値を益々小さく見るものであるといふことは、彼に従へば、人爲的諸制度や社會組織の如何と全く没交渉な、一つの自然法則と觀念されてゐるのである。

だから彼は、『社會主義の國家における利子』¹⁰⁾と題する章において、利子は社會主義的秩序の下においても猶ほ依然として存續すべきものなることを主張してゐる。彼れの言ふところによれば、『社會主義の國家が最も完全に實現された』場合、即ち『土地及び資本に關する總ての私有財産が廢止され、總ての生産手段が社會の手に集合され、總ての成員が労働者として全體のために働き、國民の生産物は總ての者に對し其の提供せる労働の分量に應じて分配される』場合においても、『個人主義的に組織された國民經濟の下において資本の利子を生むが如き原因』が noch

10) 同上, S. 579以下参照 (1912年の第三版による)

immer da sind (依然として常に其處に存在する)のである。そこで彼れの理論を辿つて行くと、『吾々は甚だ特異なる且つ注意すべき一の結論に到達する。即ち、今日社會主義者が校取利得として、勞働生産物に對する掠奪として罵つてゐるところの、かの資本の利子は、社會主義の國家においても亦た啻に廢止されぬのみか、寧ろ社會主義的に組織された社會においてこそ、勞働者に對して却てきつくなり得るのであり、またならねばならぬのである』¹¹⁾

私は今、彼れの議論を詳しく紹介することにつき、その必要も有たねば、また興味も有たない。たゞ私が前記の結論につき別に興味を感じる點は、資本主義的秩序の辯護の困難が學者を驅つて資本主義的秩序の下において特定の意味を有する若干の概念から其の歴史的特性を失はしめ、それらの概念をば歴史的範疇から永世的範疇に移すことを、餘儀なくせしめつゝある點である。

迂回的生産の各階段に入り來たる中間生産物の總體を名づけて之を資本といふと定義する時、資本の資本たるべき歴史的、社會的特性は總て失はれてしまひ、それは人類あつてこのかた未來永劫に至るまで存續するところの、否な現に類人猿の仲間にあへ存在しつゝあるところの、一般的範疇に屬するものとなる。また現在財と將來財との間に存する價值時差、之を名づけて資本の利子といふと定義する時、利子も亦た、人間の物財に對する價值判斷の能力と共に、永世に残るべき現象となる。しかし此の如き意味の資本、此の如き意味の利子が、今の世に謂ふところの資

11) 同上, S. 586.

12) 同上, S. 21.

本でもなく利子でもないこと云ふことは、勿論のことである。此の如き概念の置き換へ、それが資本主義的秩序の永遠性の論證のために、しばしば學者によつて採用さるゝところのトリックであつて、謂ゆる社會現象の自然現象化の一例である。

歴史的、進化論的な物の見方、それは現存秩序の永遠性を論證せんとする資本主義經濟學にとつて、絶對の禁物である。何故ならば、事物の永遠不變性を信することは、正に歴史的、進化論的の見地と相表裏するものであるから。それ故に、資本主義經濟學の最後の立脚地は、自然法則にある。社會現象の自然現象化にある。歴史的範疇の永世的範疇化にある。その意味において、一切の資本主義經濟學派は、盡く自然法則學派に屬するといふことが出來やう。